

中経論壇

経営支援NPOクラブ
参与

山本 章博



先日、午後3時ごろ比較的にすいているJRの車内で確認したところ、約6割の人がスマホを見ていた。午後4時ごろの電車は高校生や中学生の通学の帰りが多いのか、スマホを見ている乗客の比率はさらに増加しているようである。

メールや電話はもちろんだが、ショッピングにも定期券代わりにも使え、知らないことを尋ねれば、即座に知らせてくれ、道案内もしてくれる。また、腕時計と連動しながら、睡眠時間の計測や心拍、歩数

など体調管理まで引き受けてくれる。大変便利なツールになり、多くの人たちにはスマホが手元にないと生活できないような世の中になってきた。

しかし、自転車や車を運転しながらのスマホについては、罰則が強化されたとはいえ、近年大きな事故につながっている。東京消防庁の管内で過去5年間に158人が救急搬送されたそうである。全国ではその10倍くらいの数字になるのではないだろうか。また、その場では救急搬送されなくても、その後には障害が発生したケースも予想されることから、合計の数値は相当

歩きスマホによる衝突事故

な数になると思われる。搬送されたのは歩きスマホをしていた側なのか、ぶつかった側なのか判然としないが、搬送された年代ごとの統計数字では、50歳代がトップだろう。60歳代以降は出歩く機会そのものが少ないことから数値が低いのだろうが、歩きスマホをする年代は若年層の方が多いのに、50歳代がトップというのも興味ある数字である。若者はとっさの危険を察知してお互いに衝突をさけているのか、ぶつかっても緊急搬送されるほどの障害を受けないということなの

かもしれないが、残念ながら、50歳代では既に身体的な柔軟性が失われつつあるため、大きな結果になってしまいうのだろう。

柔軟性を失うと転んだだけでも大事故になりかねない。転倒すると骨折などの事故につながり、それが原因で寝たきりになりかねない。歩きスマホを法律だけで完全に根絶するのは難しいであろうから、自分で自分の身を守るしかない。自らが歩きスマホをしないよう注意するのは当然のことであるが、「もらい事故」を避けることも重要だ。

階段などではできる限りてすりを利用する。地下通路や一般道路などの平坦な地であっても、ぶつかって転倒する危険は存在するので、転んだ際にもとっさに身を守るようにポケットに手を入れて歩かない。こうした簡単な

「転ばぬ先の杖」で自分を守る

ことで、転倒事故を減らし、健康寿命を伸ばせると思っ